
月と新宿とフィッフルキャット

hisasi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月と新宿とフィッカルキャット

【Nコード】

N6236I

【作者名】

hisasi

【あらすじ】

新宿のとある高層ビルで、ボンボンの天才科学者、鷹山由紀夫は月のエネルギー「ルナティックパワー」を使ったクローン装置を使って恋人である川尻エリカをもう一人作り上げた。

実験は成功して由紀夫の思惑通りエリカは二人になったのだが・
。

思わぬ結末が彼を待ち受けていた！

ルナルナレポリユーション三世（前書き）

フィックルキャットは我が佞猫という意味です。

我が佞な、可愛らしい！！猫みたいな女の子に振り回される、
真面目な男のちょっと可哀なお話です

ルナルナレポリユーション三世

はたして、本当にこんな事をしていいのだろうか？
いや、それよりもこの実験は成功するのだろうか？

たかやま ゆきお
鷹山由紀夫は一抹の不安を感じながら、明け放たれたドーム状の天井から見られる、自分の顔が映ってしまいそうなほど輝いている満月に目を向けた。その満月は由紀夫にいつも自信をくれる。

エクセレント！素晴らしいフルムーン。

新宿御苑に程近い、超高層マンションの屋上にあるガラスドームに囲まれたラボラトリーの真ん中には、教会のパイプオルガンさながらに天井まで連なるクリスタルの結晶板があり、月光を浴びて数百枚ある全ての板が怪しく光っている。そして、その中心には人が十分に入れるほどの二つの透明なカプセルがあった。そのカプセルは驚くほど透明なクリスタルの装置の中に、二つ並んで斜めに埋まっている。これは見るからに特殊な装置である事は間違いない。

そのカプセルの一つには裸の若い女性が入っており、目を瞑ってお腹の辺りで腕を組んでいた。冷却装置が働いているからか、足元から胸の辺りまでカプセルのフードが霜で曇っているが、中にいる女性が裸であり、しかもとても美しいのはすぐ分かる。

肩まで伸びている、少しウェーブがかかったブラウンヘア。雪と見間違えばかりの滑らかな肌。少し狭い額と整った眉の下には、生意気そうな丸い鼻がある。目が開いていたらきつと猫のような瞳だろう。そして、薔薇の蕾の様な可愛らしい唇。カプセルに頭が届いていないので、背はあまり高くないだろうが、その整ったスタイルはうかがえた。

一方、隣のカプセルには誰も入っておらず、そのせいかカプセル全体が曇っていた。

その巨大な水晶の山みたいな大掛かりな装置の前で、由紀夫は思わずうつとりとしながら彼女を見ていた。

彼女の名前は川尻かわじりエリカ。

由紀夫の愛しの恋人なのだ。

彼はしばらく鼻の下を伸ばしながら眺めていたが、時間が迫っているのに気が付くと、顔を赤らめながら咳き込んでコントロールパネルを操作した。

開け放たれた天井から夜の風が入り込んで、彼の心を騒がせる様な音をたてるから、思わず操作する指先が震えてしまう。

別に寒いわけじゃない。秋になりかけとは言え、むしろ汗ばむくらいなのだけど、やっぱり緊張があるのだろう。

「さあ、始めるよ。エリカ」

由紀夫は彼女に声をかけると、パネルの真ん中で今か今かと待ち構えていた赤いボタンを押した。すると、パイプオルガンの様に響き立っていた巨大な装置から白い煙が床を滑るように噴出し、コンプレッサーが起こす軽い振動と共にあたりに広がった。

それと同時にイルカが鳴くような作動音が部屋中に鳴り響くと、まるで孔雀が羽を広げるようにクリスタルの結晶板が動き出した。雲一つ無い空で煌々と輝いている満月の光を受け止めるように、何百枚の結晶板がそれぞれの決められた場所に配置にされた。

すると、それらのクリスタルの結晶板を伝って月の光が徐々に二つのカプセルの上にある、ボーリングの球ほどの、大きくて丸い透明な水晶の結晶に集まりだした。その水晶の球は光沢のあるプラチナ

のような金属装置の間に浮いており、その装置から二つのカプセルには太いパイプと何本ものむき出しのコードが繋がれていた。何枚重なっても透明度が衰えないほど磨き抜かれたクリスタルの結晶板は特殊なコーティングが施されており、純粋な月の光だけを吸収し、中央に設置された大きな球に集め始めた。この装置は、月光のろ過装置、純粋集結装置なのだ。

「十五夜お月さん、ご機嫌さん」

由紀夫は鼻歌を歌いながら、月の光が集まっていく過程を眺めていた。夜空と月がこの調子なら、あと三十分ほどで十分な「ルナティックパワー」を溜める事が出来るだろう。何度も実験を重ねているからすっかり計算されつくしているし、初めての人間相手の実験とは言えきつと問題はないだろう。きつと成功するはずだ。

それにしても、何度見てもこの光景は心を奪われてしまう。ろ過され、凝縮された月の光の何とも言えない神々しさ。大きな水晶の球の中で、まるで踊っているかの様に妖しい光を波打たせている。「ルナティックパワー」が全て溜まったなら、カプセルの上にある水晶の球は第二の月となるのだ。

彼はこの美しい光景をエリカにも見せてあげたいと思ったが、カプセルの中で眠っている彼女には残念ながら見せられない。しかし、これは彼女が言い出した事なんだから仕方ないだろう。目が覚めたらきつと彼女も実験の成果に驚くはずだ。まあ、驚かすにはいられないだろう、何しろ自分がもう一人現れるのだから。

「ああ、エリカが二人になったらなんて素晴らしい事だろう。むふっ」

由紀夫は集められた月の光と、カプセルの中でまるで子猫の様な

穏やかな寝顔をしているエリカの顔を見ながら、つい一ヶ月前の事を思い出していた。

一ヶ月前、大学の夏休み中だったエリカは、新宿の超高層ビルの最上階にある由紀夫のマンションのキッチンで、一人きりの遅い朝食を取っていた。焼いたクロワッサンとカフェ・オ・レを寝起きでぼさぼさの頭をそのままに、彼女は半分瞼を閉じながらもぐもぐと口を動かしていた。

一方、由紀夫はマンションの屋上にある自分のラボラトリーで「ルナティックパワー」凝縮装置、名付けて「ルナルナ、エボリューション三世」の製作と実験に没頭していた。この装置は生物の細胞における月の光の影響を最大限に引き出し、ミクロゲノム操作によって特別培養された細胞核の分裂速度を速め、なおかつコントロールして生物のクローンを作ろうと言う、画期的な装置だった。

二十年間続けている研究と、曾祖父から四世代にわたって受け継がれた研究データに基づき、生物の記憶を形成、保存、そして、再記憶させるシステムは完成されていたが、「ルナティックパワー」を凝縮させる装置はまだ実験段階なのだ。ようやくウサギ程度の大きさの動物ならクローンに成功していたが、由紀夫としてはまだ十分ではなく、更なる研究を続けなくてはと思っているところだった。由紀夫はこの装置に二十八年の全てを捧げてきたと言っても過言では無い。

そんな彼がまな板ほどの板状の高純度クリスタルを一枚一枚精密検査にかけて、特殊媒体をコーティングしていると、ふいに後ろから声がした。

「おはよう」

パジャマ姿のエリカだった。由紀夫は作業していた手を休めると、

入り口にいた彼女に向かって軽く微笑んで挨拶を返そうとした。しかし、それを彼女の言葉が遮った。

「ねえ、天気が良いからドライブに行こうよ！私、海がいいな」

「え？でも、今日はまだ研究が・・・」

戸惑いながらそう口にする由紀夫にかまわず、エリカは言葉を続けた。

「でも、こんなに天気が良いんだから、ここで研究なんてしている事ないわよ。私は海に行きたいの！波を見に行きたいの！」

エリカがそう言ってラボラトリーの中に入ろうとしたので、由紀夫は慌てて声をかけた。

「あつ、そのままはいっちゃ・・・」

だが、エリカはかまわずサンダルの音をパタパタとさせながら、まるで猫がおもちゃに飛びつくように由紀夫の近くにやってきた。

「埃が舞って水晶が汚れちゃうんだよなあ。今やってるコーティン
グが・・・ああ」

由紀夫が残念そうに水晶板に眼を落とすと、エリカは屈託のない笑顔を向けながら由紀夫の清潔な作業着越しに後ろから抱きついた。

「ねえ、行こうよ。海行こうよ。ねえ」

エリカは猫がじゃれる様に体をスリスリすると、張り付くような

猫なで声をだした。

由紀夫はそのどうしたって可愛らしい様子に、思わず顔を赤らめてうっとりさせると、使い物にならなくなった水晶板をほっぴり出して、エリカに向き直った。

「海かあ？」

「そう、海！きつと入れば気持ちいいよ！」

「海ねえ。・・・でもなあ、まだやる事が・・・」

由紀夫が不満そうなポーズを取ると、エリカは甘えたような声を出しながら、猫の様な瞳をクリリと輝かして見上げてきた。

「あのね、あのね。昨日買ったの」

「何を？」

「イチゴ柄の新しい水着！とっても可愛いの！今日着ちゃおっかな！」

彼女はそう言って心を撫でるように由紀夫を見た。長い睫毛は化粧していないのにくつきりとしており、その水晶顔負けに透き通った瞳を際立たせている。由紀夫の顔が思わずほころんだ。この顔でそう言われたらそうなるしかないだろう。

「行こう！すぐ行こう！」

鼻の穴を膨らませながらそう言ってきた由紀夫に、エリカは大げさなくらい喜んで、薔薇の蕾の様な唇を花開かせた。

「やったー。じゃあ、決まりね！」

彼女はそう言って由紀夫から離れると、くるくると回りながら、

興奮したのか「ワー！」と声を出しながら嬉しそうに「ルナルナ・レボリューション三世」に近付いた。

「あつ、そつちはあまり行かないで！」

慌てて由紀夫がその声をかけたが、エリカは聞こえなかったのか、聞く耳を持たなかったのか、すでに装置の目の前にいた。なので、由紀夫も慌てて「もう壊されちゃかなわないな」と口ごもりながら後を追った。

天井まで届きそうなほどの、煌くクリスタルの集合体をエリカは見上げていた。

「とつても綺麗ね。大きなガラス細工みたい」

エリカのすぐ後ろに来て、由紀夫は誇らしげに頷いて、それに応えた。

「そうだろ？これで月の光を集めるのさ」

「へー、月の光をね」

「ああ、僕の曾おじいさんの頃からずっと研究を続けてるんだよ。この新宿よしほでね。祖父によると、ここが一番月の力を受けやすいみたいなんだ。ここまで来るのに、莫大なお金がつぎ込まれてるんだよ」

すると、エリカは分かったように頷きながら、由紀夫の顔を見てきた。

「そう言えば、由紀夫の研究って詳しく聞いた事なかったけど、一体何をしているの？」

「クローン技術さ。それもパーフェクトなね。これまでも、同じ個体の複製を作り出す事は出来ていたのだけど、生物的に同じという

だけで、その個体のパーソナリティまでは植えつけられなかった。記憶みたいだね。それに、どうしたって子供から成長しなくちゃならないから、大きくなるまで時間がかかるわけだ。それを克服しようとして注目されたのが月の光であって、ああ、あそこの磨き抜かれたクリスタルボードを見て、すごいでしょ！あれで月の光を凝縮する事によって、生物の細胞活性のレベルを高め、遺伝子的に……」

そこまで力説して、由紀夫の口はエリカに遮られた。彼女の顔に苛立ちが浮かんでいる。

「で？要するに、どういう事？」

エリカの表情に若干焦りを感じながら、由紀夫は言葉を選んで説明した。

「つまり、個体をそのまま複製出来るって事さ。記憶や性質、そうだなあたぶん性格に至るまで、完璧な個体がもう一つ作り出せるのさ」

それを聞いた途端、エリカの表情が一瞬で輝いた。目の奥で何やら思惑が蠢いている。

「じゃあ、例えばこれを使えば、もう一人の人間が出来るって事？まったく同じ」

由紀夫は頷いた。

「まあ、そうだね。理論的には。だけど……」

由紀夫の言葉をまたエリカが遮った。興奮を抑えているのか、少し声が低い。

「じゃあ、何？もしかして、私がこれを使えば、もう一人の私が出

来上がるって事？」

エリカは大きな目を猫のように鋭く光らせて由紀夫をうかがった。
「まあ、そうだね。でも、人のクローンを作る実験はまだした事ないし、それに倫理上の観点から見ても重大な問題が・・・」

「やって！」

「え？」

由紀夫は驚きに耳を疑いながら、彼女の顔を見た。すると、彼女はもう一度口を開いた。

「今すぐやって！」

エリカの目は。思いがけず真剣だ。

「今すぐって・・・」

「この装置を早く完成させるのよ！」

「い、いや、でも、これから海に行くんだろ？」

その言葉に、エリカは激しく首を振った。

「それどころじゃないわ、何言ってるの！私がああなたの研究の邪魔する訳ないじゃない！もう、嫌だわ。海よりこっちの方が大事よ！」

由紀夫は戸惑いの表情を浮かべながら、すっかり目を輝かせているエリカに近付いた。

「でも、さつき海に・・・」

すると、エリカは由紀夫の体に触れて、上目使いで猫のような瞳を潤ませた。

「おねがい」

彼女は耳辺りのいい、甘えるような声をだしながら由紀夫の胸に顔を埋めた。

「ねえ、嫌なの？」

由紀夫の顔は瞬時に真っ赤になる。

「べ、別に、嫌じゃないよ。でも・・・」

「おねがい。エリカ、いい子にしているから」

由紀夫はしなだれかかってくるエリカの髪の毛の香りにくらくらとなりながら、すっかり舞い上がっていた。こんなに甘えてくるエリカは久しぶりなのだ。

「よし！分かった！すぐに完成させよう！」

その言葉が出た途端、エリカは太陽みたいに顔を輝かせて、嬉しそうに笑った。

「やった！エリカ嬉しいわ！」

由紀夫も同じように有頂天になりながら笑い声を上げた。彼は「今日のエリカはなんて可愛いんだ」と思い、勢いに乗ってここぞとばかりに彼女の唇を奪おうとしたが、彼女はそれを察知したのか、さっと猫のように身を翻して入り口に向かつて歩き出していた。

「ああ、エリカあ」

残念すぎて思わず由紀夫が口を尖らせると、エリカは媚びる様な目つきを向けた。

「ねえ、作ってくれないの？」

由紀夫は、何故か自分が悪くなった気がして、慌てて首を振った。すると、エリカは急に打って変わったように眼を吊り上げて、由紀夫に向かって指をさした。

「じゃあ、早く作って！出来上がるまで、一秒も暇は無いわよ！」

そう言って、彼女は何も言えないまま立ちすくむ由紀夫を後にして、ラボから出て行ってしまった。

入り口の向こうから、去って行くエリカの声が聞こえてくる。

「ああ素晴らしいわ！私がもう一人出来たら、そっちを大学に行かせて、私はゆつくり遊べるわ！なんていいんでしょー！」

ああ、可哀想に由紀夫はがっくり頂垂れるしかなかったのだ。

あれから、寝る間も惜しんで装置を作り上げた。理論的にはすでに緻密に構築できているし、実験の結果も間違いはなかった。だからもう少しでもう一人のエリカと対面出来る訳だ。そして、あんなに魅力的で愛しい女の子が二人も自分の傍にいてくれる事になるんじゃないか！

由紀夫はそう妄想を浮かべて一人で悦に酔いしれていた。

それだけが、この一ヶ月間の由紀夫のモチベーションだったのだ。

いつの間にか大きな水晶の球は十分に「ルナティックパワー」を集めており、空の上に浮かんでいる本物の月と変わらない輝きを放っていた。もう十分だろうな。

由紀夫はそう思って、パネルを操作すると、もう一度赤いボタンに指を向けた。これで、もう一つのカプセルの中にあるES細胞が活性化されエリカのクローンの体が形作られる。そして、同時にそのボディの脳にエリカの記憶がコピーされるだろう。

この大きさだと八時間はかかるだろうか。朝起きる頃には二人のエリカがいる計算になる。由紀夫は思わず笑みをかみ締めた。

しかし、一方で不安もあった。

本当にいいのだろうか？いや、それは倫理的にどうか、実験が失敗するからとかではなく、何か言葉にも数値にも表れないような不安が心の隅にあって、それが拭えなかった。

何か大変な事が起きるんじゃないか？

そう思ったのだ。

しかし、もし実験を行わなかったら、きっとエリカが激怒するだろう。実験が失敗したと嘘をついても、きつと怒るだろうし、彼女

は諦めるような性格じゃない。絶対に成功するまで何度もやらされるに決まっているんだ。それなら、今やっっておいた方がいいだろう。始まった以上、今更後には引けないのだ。

由紀夫はそう思いながら、赤いボタンを押した。

すると、装置がまた音をたてて振動し、月の光が凝縮されていた水晶の球が輝きを増すと、それを支えていた金属装置につながれたパイプを通じて、「ルナティックパワー」がまずエリカの体を包み込んだ。カプセルは光に包まれて、すっかり彼女の体を隠した。冷凍睡眠状態の彼女はきつと何も感じずに、夢の中だろう。19歳になりたての体は、すっかり由紀夫の視界から消えてしまった。これで二時間後にはデータが隣のカプセルに送られて、新しい彼女のクローンが形成されるはずだ。もう一つのカプセルで同時進行させている細胞の成長も状態は良さそうだ。

由紀夫はまず安心して、様子を見守った。そして、座り慣れたりクライニングチェアに腰掛けると、背もたれをいっばいに倒して、疲れが溜まりきっている眼を閉じた。

最近、研究のおかげでろくに眠ってない。エリカが常にせっついていたせいもあるけど、やはり緊張が続くのは体に響くな。まあ、それももう少しの辛抱だ。

由紀夫はそう思いながら体の力が抜けていくのを感じた。

夢を見た。正確に言えば思い出さるうか。心地よい眠りの中、由紀夫は初めてエリカと会った時の事を思い出していた。

あれは今から半年前の事である。

由紀夫は夜も遅くなってから、新宿駅から自分のマンションと言っても三年前に事故で亡くなった両親から受け継いだ、先祖代々所有しているマンションなのだが、に帰る途中、クリーム色のタイル

が敷き詰められている商店街通りの真ん中でキーホルダーを拾った。それは猫のキャラクターがプリントされた皮製のブランドキーホルダーだったのだが、何よりも特徴的なのは、それに全長二十センチほどの、白い猫のぬいぐるみがくっついていている事だった。拾った瞬間、由紀夫は思った。

「何でこんな大きな物を無くせるんだ？しかも落としても気が付かないだなんて！」

すぐに持ち主に興味が湧いた。

当然だが名前は書いてなくて、中には家や自転車の鍵がついていた。見るからに女性の持ち物だとは思ったし、どちらかと言えば若い女の子だろうと思った。おばあさんがこれをもっていたら、ファンキーすぎる。それに、こちら辺は若い女の子が良くいるのだ。

研究ばかりで女の子に疎かった由紀夫は、そのキーホルダーを見て新しい出会いを思い浮かべた。まあ、若いのだから当然だろう。

由紀夫は優しそうな顔で、ひよろりとしているのだけど、小学校から白衣しか着た事が無いので、見るからに冴えなかった。小、中、高通じてあだ名が「博士」だったのは言うまでもないが、日本の大学院で本物の博士号を取ったのだから頭脳ももちろん優秀だ。それから彼は彼の事を誰も「博士」とあだ名をしなくなった。何しろ周りは「博士」だらけなんだから。なので、その代わりに、「ルナティックパワー」の研究ばかりしていたから「ルナルナ」と呼ばれるようになった。彼を担当した女性教授がそう名付けたらしい。そんな変わり者の彼だが、特出するべき長所がひとつあって、それは先祖代々「ルナティックパワー」を追い求めている日本の富豪一族の後継者と言う事だった。だから、新宿の一等地に超高層マンションを持ち、その屋上にラボラトリーを持ちえているのだ。要するにボンボンなのである。

だが、由紀夫はそれを誇示する事はなかった。根が真面目だから、一族の期待通り全てを「ルナティックパワー」に捧げていたのだ。しかし、そんな彼でも恋をするのだから世の中は不思議に満ち溢れているではないか。細胞に影響を与えるほどの「ルナティックパワー」があるのも頷けるというものだ。

ご想像の通り、由紀夫はその大きな人形の付いたキーホルダーの持ち主と恋に落ちた。

それが、都内の女子大に通っていたエリカだったのだ。彼女はその年の春に上京してきたばかりの大学一年生で、右も左も分からない新宿に遊びに来て、はしゃぎすぎたのが大切なキーホルダーをなくしてしまったのだ。

由紀夫は正直にそれを交番に届けようと思った。あんなに目立つところにあつたのに、誰も気が付かないのか、それとも何かに警戒したのか、置き去りにされた猫のぬいぐるみを可哀想と思ったのかかもしれない。あるいは、やはり下心があつたのかも知れない。真意は分からないが、とにかく由紀夫はそれを届けようと交番に来て、そこにいた何人かの警察官に声をかけようとした。

ちょうどその時、二人は顔を合わせた。

新宿は広い上に、いつ鍵をなくしたか分からずに、彼女はすっかり困って探し回っていたのだが、まったく知らない土地だし、自分がどこにいるか分からないし、頭はパニックになっているけど、東京の人間はどこか冷たく感じて声もかけられなかった。自分の知っている人間には強気な彼女も、知らない人間には人見知りしてしまうのだ。

上京して初めてのピンチ！

だから、交番に行くなんて彼女にとっては結構勇気がいったらう。とにかく、彼女は動物的本能で、その交番に駆け込んだのだ。そして、そこに自分の捜し求めていた物を持った、背の高い白衣姿の男がいたと言っ訳。

何たる偶然！いや、運命の力だろう！
彼女はすぐに声をかけた。

「あーシューちゃん！探したよ！」

彼女はまず、落とし物を拾ってくれた由紀夫ではなく、キーホルダーについていた猫のぬいぐるみに声をかけた。

当然、由紀夫は驚いた。

何しろ、交番にいる警察官に今拾ったばかりのキーホルダーを差し出して、いざ話しかけようと思ったところに、いきなり女の子が現れて自分の手からそれを奪い去ったからだ。一瞬、動きを止めた由紀夫は、ぬいぐるみを胸に抱きながら泣きじゃくっているエリカに視線を注いだ。そして、そのまま目を、いや心を奪われた。

なんて可愛らしい女の子だろう！

この場合、一目惚れというのが一番適格だろう。何しろ、お礼もまだ言われていないと言う失礼な態度を取られているのに、それすらも彼の頭から消してしまったのだから。

「どうかされました？」

泣いているエリカを不審に思った警察官に声をかけられるまで、由紀夫は彼女を見ていた。ただ、由紀夫もその質問に的確には答え

られなかった。何しろ、いきなりエリカが泣き出したのだから。なので、とりあえず自分の行動だけを説明した。すると、何故か彼女と一緒に調書を取られる事となった。

そこで初めて、エリカは由紀夫の存在を知り、改めて彼にお礼を言った。

「どうもありがとうございます」

その可愛らしい声と、猫の目そのままの彼女に、由紀夫は改めて陥落されたのだ。調書を取りながら、由紀夫はエリカの事を知り、ますます興味を持ったのは言うまでもない。

そして、交番から開放された後に、人生で一番の勇気を振り絞って彼女をお茶に誘ったのも、やはり当然の事だろう。

由紀夫はその時の事を思い浮かべながら、すやすやと楽しげな寝息を立てるのだった。

気が付くと、開け放たれた天井からは朝日が差し込んでおり、すっかりラポラトリーの中を照らし出していた。月の光よりも強い太陽光がクリスタル板に反射して、そこら中に虹を作っている。そして、寝ている由紀夫の顔にも眩しくて熱を持つ光を浴びせていた。

「う、うんっ」

由紀夫は眩しさに耐えかねるように目覚めると、大きな欠伸をして体を伸ばした。寝心地の悪いリクライニングチェアでも驚くほど熟睡できていた。久しぶりすぎて、半ば夢見心地であったが、自分の今いる場所が分かると、昨日の記憶が思い出されたのか、その場で飛び上がった。しまった！

「エリカ！」

由紀夫はすぐに「ルナルナ・レボリユーション三世」に駆け寄ると、エリカがいるであろうカプセルを覗き込んだ。すると、そこにエリカの姿はなかった！由紀夫はびっくりして、カプセルの中に頭を入れてまで探したが、どこにも姿が無い。

「エリカ！エリカ、どこに行った！」

由紀夫は必死になって叫び声を上げた。まさか、実験が失敗して蒸発してしまったのか？ああ、何てことだ。由紀夫が顔を真っ青にして息も出来ないまま呆然としてしていると、後ろから聞き覚えのある声が飛んできた。

「どうしたの、由紀夫？呼んだ？」

由紀夫は慌てて後ろを振り向いた。そこには紛れもなく、何一つ欠けていないエリカがいた。いつも見ている、大きなリボンの付いたパジャマを着て、可愛いパンドのスリッパを履いている。由紀夫は思わず彼女に駆け寄り、力強く抱きしめた。

「ああ、良かった。無事だったんだね」

「当然よ。大丈夫だって。それより痛いわ」

「ああ、ごめん」

由紀夫が慌てて彼女を離すと、彼女はにっこりと笑って、ピンク色の歯ブラシを口に入れて手を動かした。

「ああ、紛れもなくエリカだ」幸雄はそう思った。彼女は歯ブラシをしながら歩く癖があるのだ。しかし、彼女がここにいるなら、実験はどうなったのだろうか？成功したのか？

由紀夫はもう一つのカプセルの方を見ながら、おもむろに口を開いた。

「ところで、実験はどうな・・・」

由紀夫がそう言いかけた時、ラボの入り口から聞き慣れた金切り声と、どたばたと向かってくる足音が聞こえてきた。

「ちょっと！誰が私の歯ブラシ使ってるの！もう、嫌になっちゃわわ！」

心臓をつかまれたように驚きながら、由紀夫は入り口に目を向けた。

そこには、白いバスローブを纏い、頭には白いタオルを巻いているエリカがいた。

「ごめん、ごめん。私が使ってるの」

パジャマ姿のエリカがそう言った。すると、バスローブ姿のエリカは眉を吊り上げて、怒っているのをアピールするかの様に、腰に両手を当てながらこちらに向かってきた。

「ちょっと、勝手に使わないでよ」

「だって、私のだからいいでしょ？」

「でも、私だって使う予定だったんだから。大体、そのパジャマだって私のなのよ」

「いえ、パジャマも歯ブラシも私のよ。だって私が今使ってるんだから」

「何ですって！生意気な！」

「何よ！文句ある？」

「何よって何よ！」

「何よって、何よって何よ！」

二人のエリカは一瞬触発の状態で向かい合っていた。急にそんな状態に巻き込まれた由紀夫はおろおろしながら二人を見ていたが、今

にもつかみ合いになりそうだったので、慌てて仲裁に入った。

「ふ、二人共ちよつと落ち着いて！」

すると、二人は声を揃えて彼に向かって怒鳴り返してきた。

「あなたは黙ってて！」

可哀想に由紀夫は身を縮ませて「はい」と言うしかなかった。二人のエリカはお互いに向き直りと、すぐ手の届くほど近くまで寄り、恐ろしい形相で睨みあった。

「まったく、あなたって見るからにいらいらしてくるわ。まったく、大体何よその・・・あら、シャンプー今日はローズを使ったの？」

パジャマ姿のエリカが急に表情を変えて、バスローブ姿のエリカの頭に鼻を近づけた。

「そうよ。だって、今日はそんな気分だもの」

「いい香りね。ラベンダーよりずっといい」

「あら、そう？私もそう思ったのよ。だから、新しく封切っちゃった。あなたのそのパジャマも素敵よ。パンダのスリッパも可愛いし。あなたによく似合ってるわ！」

「あら、そう。ありがとう！このリボンが可愛いでしょ？新宿で色々探したのよ」

いつの間にか二人のエリカは笑顔になっている。由紀夫はただ二人を眼で追った。

「そうなんだあ、それってすごくセンスあるわ！私も今すぐ着たいもの！」

とバスローブ姿のエリカ。

「私だって、そのシャンプーの香り素敵に思うわ。すごくいいチョイスしたと思う」

と、パジャマ姿のエリカ。

「あつ、ちよつとあなたの髪の毛触らせて。ああー、つやつやしてる！コンディショナー何使ってるの？」

パジャマ姿のエリカはそう言って、バスローブ姿のエリカの髪の毛を触った。

「もちろん、あれに決まってるじゃない！」

「ああ、そうやっぱあれよね！」

「そうよ、あれよ！あれじゃないと」

二人のエリカは意気投合したように両手を合わせると、嬉しそうに声を揃えた。

「やだあ、私達って気が合うわね！」

そして、口が開けっ放しの由紀夫をその場に残し、仲良く腕を組んでラボラトリーの入り口に歩いていってしまった。その後姿は本当の姉妹のようである。

「と、とにかく実験は成功のようだ。うん」

由紀夫は嬉しいやら驚いたやらで、複雑な気分になった。なので、気分を落ち着かせるようにシャツの襟を崩すと、重力を取り戻したように、どっしりと深くリクライニングチェアに腰を下ろした。

「ああ、びっくりした。二人が詰め寄っていくから、もしかしたら血を見るかと思ったよ。エリカはすぐ引っかくからなあ。あつ、そうだ！歯ブラシはすぐに買いに行かなきゃな」

そう思っ頭をかくと、大きく溜息をついて、また背もたれを倒し天井を見上げた。

なんで「じつなるの……！」（前書き）

何でこうなったかは、ご自分で考えてくださいまし

男って哀れな生き物ですね トホホ

なんでいつなるの！！！

由紀夫が自分の部屋に戻ると、ダイニングでは二人のエリカが仲良くお茶を飲んでた。テーブルに二人並んでいると、どっちがどっちだかまるで見分けが付かない。まあ、それはそうだろう、何しろ一方は完璧なクローンなのだから。どちらも身支度を整えて、同じような黒いニットを着ている。仕草も、声も、髪型も、化粧の仕方もしっかり同じだ。

おや、ピアスをしていない方がクローンなのだろうか。これは発見だ！

二人のエリカは由紀夫の顔を見るなり、同じように手を振ってきた。

「由紀夫、こっちで一緒にお茶しましょう！」

声の揃った呼びかけに、由紀夫は複雑な心境になりながらも、気分良くそれに応じて彼女達の正面に坐った。

「さて、実験はパーフェクトだったようだね」

由紀夫がそう言うと、ピアスをしているエリカが口を開いた。

「そう？私つてもっと痩せてない？」

すると、ピアスをしていないエリカが口を尖らせながらそれに答えた。

「これで十分よ。痩せすぎよまし」

「そうかしら」

「そうよ」

今にも二人がさつきみたいない合いになるのではと思い、由紀夫ははらはらしながら慌てて口を挟んだ。

「二人共一緒だよ。十分過ぎる位いいスタイルだ。間違いない」
すると、二人は同時に微笑を向けた。

「あら、ありがとう」

由紀夫は一つ咳き込むと、言葉を続けた。

「と、ところで、ピアスをしていない方が、クローンのエリカだよ
ね？」

「そうだけど、私は私よ」

「そうだけど、何しろ全てが一緒だからこっちは分かりづらくてさ」
「それもそうね」

ピアスをしていないエリカは大きく頷いた。由紀夫は安心したように胸を撫で下ろすと、言葉を続けた。

「エリカは・・・」

同時に二人が「何？」と言って振り向いた。

まったくややこしい！

由紀夫は慌ててピアスのないエリカに顔を向けて喋りだした。

「君は、ピアスをしない様にね。でないと僕が分からなくなっちゃ
うから」

すると、彼女はすぐに不満そうに口を歪めた。見慣れたエリカお
得意の顔だ。

「ええー、そんなのやだ！勝手に決めないでよ！何で私だけ駄目なの？彼女だつてしてるのに！私だつてピアスしたい！絶対開ける！」
「だ、だけど、それじゃあ僕が・・・」

すると、ピアスのエリカが口を挟んできた。
「ピアスなんてしなくても、十分にあなたは可愛いわよ。私はそう思うけどな」

自分がピアスをしている事はお構いなしなのが、まったくもってエリカだ。すると、ピアスのないエリカは、気分が良くなったのか髪をかき上げながら口元を緩めた。

「あら、そう。じゃあ、しないででもいいかも」

相手の矛盾よりも自分の気分を優先して、なおかつお世辞に簡単に乗ってしまうのも、まったくもってエリカだった。

由紀夫はついおかしくなって、思わず笑ってしまった。

すると、二人のエリカの右眉が同時に攣り上がった。見慣れた不機嫌な表情だ。

「何がおかしいの？」

由紀夫は慌てて首を振った。

「私、あなたのそういうところがイラっとくるのよね。馬鹿にするみたいなの」
「そうそう」

二人のエリカは同じように眼を細めて、由紀夫を責めだした。

「大体、冷蔵庫にはオレンジジュースを絶対切らさないでって、あれほど言ったのに」

「そうよ、私達、コップに半分ずつ飲んだんだからね。クロワッサンも足りなかったし」

「いや、それは今日買いに行こうと・・・」

「言い訳しないで！」

二人のエリカは打ち合わせでもしていたかのように、非難の声を揃えた。一人でも辛いのにダブルで攻撃されると、ダメージは二倍以上だ。由紀夫は溜まらず、話を逸らそうと大げさな身振りで話を始めた。

「それは悪かったね。ごめん。と、ところで、どうだい？ご飯でも食べに行かないか？もう、十二時過ぎているから。僕もお腹空いてるし、君達だってまだ足りてないだろ？」

すると、二人は顔を見合わせて大きく頷いた。由紀夫は間髪いれずに口を開いた。

「よし、決まり！外にご飯を食べに行こうね。そうだな、何を食べに行きたい？」

そう言うてから、由紀夫は後悔した。エリカの食へのこだわりはすごいのだ。ここで二人の意見が合わなかったら、喧嘩が始まるに違いない。そして、思ったとおり、二人の意見は割れた。

「お蕎麦！」

とピアスのエリカ。

「うなぎ！」

と、ピアスなしのエリカ。

二人は思わず顔を見合わせ、由紀夫の目の前でパチパチと火花を散らした。

「私、今日は軽めの食事にしたいな。うなぎなんてちょっと重た過ぎるわ」

「私、なんだかお腹減っちゃってるの。蕎麦なんかじゃ足りなくて困っちゃう。それに、約束してたもん。ねっ、由紀夫」

そう言っつて、ピアスなしのエリカがウィンクしてきたので、由紀夫は思わずデレッツとなって頷いた。すると、ピアスのエリカがむつと顔を赤らめて、キューブの砂糖を由紀夫の顔に投げた。

「嫌だわ、デレッツとしちゃって！」

「だって、エリカがウィンクしてきたら嬉しいじゃないか！仕方ないだろ！」

「でも嫌なの！」

「もうやめてよ、妬くなんて子供みたい」

そう言っつて、ピアスなしのエリカが勝ち誇ったように言うので、ピアスのエリカはむくれてまた砂糖の欠片をいくつも投げてきた。

「馬鹿！」

「ちよつと、やめろつて！」

由紀夫は顔の前を手でふさぎながら、体をのけぞらせた。その瞬間にバランスを崩してしまい、由紀夫の椅子はひっくり返り、大きな音が響いた。衝撃が由紀夫の背中を伝う。それほど痛くはなかったけど、それ以上に驚きで呆然としてしまい、しばらく動かないまま天井を見上げた。すると、心配そうな二人のエリカの顔が視界に入ってきた。

「大丈夫？」

二人の揃った声は、少し震えており、自分でもびっくりしている様だ。なので、由紀夫は作ったような笑顔を顔に貼り付け、口を引きつりながら

「大丈夫！」

と言ってお親指を立てた。二人のエリカに心配されると、なんだから二倍優しさを感じるから、それが何とも言えず嬉しい。彼女達は由紀夫の両脇に腕を入れて、彼をその場に立たせてくれた。

「全然平気だから。ちょっとバランスを崩しただけさ。なんともないよ」

由紀夫がそう言ってエリカに笑いかけながら彼女の肩を撫でると、触れていない方のエリカが申し訳無さそうに口を開いた。

「ごめん。ごめんなさい」

なぜかもう目に涙が溜まっている。肩を力なく下ろしながら、目を手で覆って俯き始めた。

「まずい！泣き出すぞ！」

由紀夫は慌てて、すぐにピアスのエリカの肩を抱いて慰めにかかった。

「大丈夫だって。泣かないの。ほら、全然痛くも痒くもないからさ。泣かないの」

由紀夫の優しい言葉に、ピアスのエリカは鼻を嚙りながら、何度も頷いた。手で涙を拭う姿は、とってもいじらしい。

すると、あるう事が、ピアスなしのエリカまで泣き出してしまった。

「な、何で君が泣くの？」

思わずそう聞く由紀夫に、ピアスなしのエリカは泣き声交じりにこう応えた。

「だって、だって！私が泣いてるんだもん」

勘弁してくれ！

由紀夫は天を仰ぎたくなかったが、ピアスなしのエリカも擦り寄ってきたので、その可愛らしい頭を撫でてあげた。

二人のエリカが泣きながら自分に身を寄せているのは悪くない気分だ。由紀夫も二倍包容力が増した、優越的な気分になる。

「よしよし、二人とも泣かないの」

由紀夫はそう言って、二人のエリカの頭を撫で、肩に優しく触れた。すると、由紀夫と彼女達お腹が同時になった。途端に三人は顔を見合わせて、笑い声を上げた。

「さあ、ご飯を食べに行こう！」

すると、彼女達は同時に声を上げた。

「お蕎麦に！」
「うなぎに！」

思わず顔を見合わせる二人に、由紀夫は両方のエリカの肩に手をかけて笑いかけた。

「美味しいうなぎを食べさせてくれるお蕎麦屋さんを知っているんだけど、どう？」

すると、二人のエリカは万遍の笑みを浮かべて、白い歯を見せつけながら声を揃えた。

「いいわね！ぜひ行きましょう！」

三人は初めて気があった様に笑い合った。

それから三人の生活が始まったのだが、それは幸雄が夢見ていたような、甘くて都合のいいものからは、遠くかけ離れていた。

由紀夫は「ルナルナ・レボリューション三世」を作りながら、二人いるエリカが自分と楽しく過ごすのを思い浮かべていた。

右を見てもエリカ。

左を見てもエリカ。

猫の様に愛らしい四つの瞳に見つめられたら、きっと自分は嬉しくて死んじゃうんじゃないかと思っていたのだ。それに、きっと二人を連れて街に繰り出せば、こんなに冴えない由紀夫も皆の注目の的になるはず、そう思っていたのだ。

しかし、どうだろう！この想像とあまりに違う現実は。

彼女は、いや彼女達はやっぱりまるで、とにかくエリカだった。ああ、初めから気が付いていればよかったのに。

彼女は一人っ子で、田舎で愛情たっぷりの家族に、骨の髄まで甘やかされて、もとい、可愛がられて育った女の子なのだ。初対面ではそれが分からなかったからたやすく恋に落ちたけど、一緒に過ごす度にすぐにその片鱗は感じていたじゃないか。

まあ、それでも好きなのだから、由紀夫にはどうする事も出来ないだろうけど。きっと彼は振り回されるのが好きなんだろう。

とは言え、一人のエリカでも持て余していたのに、二人もエリカがいたらどうなるのか、簡単に想像していただけるだろう。

しかし、後悔しても、もう遅かった。

由紀夫にタイムマシンを作る頭脳と能力は無い、と言うよりも二人の相手をするので研究どころではなかったのだ。

「あれが欲しい！」

と言われれば、当然のように二人前揃えなくちゃならないし、食事だって二人前作らなくちゃならない。買い物はお金のある由紀夫にはまだなんとかなったが、料理はそうもいかない。前からエリカは由紀夫の為にご飯なんか作ってなんかくれなかったけど、二人いたらどちらか作ってくれてもいいんじゃないか！と言う、由紀夫の淡い期待は露と消えてしまった。

夏休みも終わり、大学が始まってもしエリカは授業には出なかった。なぜかと言うと、どちらも大学に行きたがらずに、二人で遊ぶ方を選んではしまうのだ。

始めは当初の予定通り、オリジナルのエリカが、クローンのエリカに大学に行くように言ったのだが、そこはクローンでもエリカはエリカなので、難癖つけて丸め込もうとするので、まったく埒が明かなくなり、終いには由紀夫が交互に行けばいいと言っても、鼻から彼の意見など参考にしようとする気配は無いので話は平行線。

なので、結局二人の話し合いの末、二人で遊ぶ事が決まってしまうのだ。

厄介なのは夜だ。

「もう寝る。まぶたが閉じる！」

と言われれば、二人が眠りに落ちるまで添い寝しなくちゃならぬいし、どちらか寂しがりやだから二人の間からベッドを離れる事すら出来ないのだ。

一方がしがみついてくるかと思うと、もう一方は足を絡めて来る。

これでは熟睡なんて出来やしなかった。

なので、由紀夫は昼間寝る事になるのだが、その間にエリカ達だけで遊びに行ってしまう、充実しているのは由紀夫ではなく、彼女達だけになるという訳なのだ。これでは、由紀夫が楽しめるはずは無かった。

むしろ、地獄である。

しかし、それよりもきついのには、一日一回は聞かれるこの質問をされる事だろう。

「由紀夫は私と私、どっちが好き？」

可愛らしい二人のエリカの、四つの猫のようなクリリとした瞳に見つめられてこう聞かれたら、一体どう答えればいいというのか？
こんなの教科書には乗っていないのだ。

「オリジナルの方」

たとえば、クローンの方は絶対泣くし、不機嫌になるし、引つかいてくるだろうし、由紀夫の家から出て行くに決まっている。

クローンの方と答えても、オリジナルが同じ行動を取るだけだ。それはなんとしても避けたかった。何しろ両方好きなのだから。

しかし、ここが厄介で正直に「両方好きだ」と言っても、やはり厄介なのは変わらない。

「あなたを独り占めしたいの」

と言って、彼女達は満足してくれないのだ。一見嬉しい悲鳴のようだが、由紀夫の体が一つしかないのを想像してほしい。それに、別に浮気をしている訳でもないのに、片方に興味が偏るともう片方から嫉妬されるし、あつちにやったら、こつちにも同じ事をしてとか、あつちを見ているのが一秒長いとか、どうしてこつちにはこれだけしかくれないの？とか言われ続けていれば、誰だってもう勘弁願いたいと思うに決まっている。

イスラムの世界では四人まで妻を娶っていいと言う話だが、由紀夫は一人で十分だと思った。一人の愛情は一人にしか伝わらないと、身に染みて感じてしまったのだ。

ここに来て、由紀夫は一つの決意を固めた。

そう、これを解決する方法は一つ！

由紀夫自身をもう一人作ればいいのだ！

そう思ってから、次の満月を待ち遠しく思う日々が続いた。満月の夜にしか「ルナティックパワー」は発生しないからだ。

だから、由紀夫はそれまでの間、我が侏勝手な二人のエリカに振り回され、身も心もボロボロになりながらも、僅かな希望だけは失わないでいられた。それ以外に解決策は無いと思いついて、二人が

無計画にたくさん買うから重労働になる荷物運びも、好みのうるさい彼女の為に作る二人前の料理にも、解決策のない理由なき嫉妬攻撃にも、まったく熟睡できぬ夜にも耐えてこられたのだ。

なので、満月が予想されていた日が曇りだと知った時の由紀夫が、いかにテレビの前で絶望したか思い浮かべていただきたい。

彼は、適当そうな予報を立てる中年お天気キャスターの首を絞めなくなるほど睨みつけ、頭を抱えてソファの前で悲観にくれた。すると、二人のエリカは不思議そうな顔をするのだ。

「由紀夫、どうしたの？」

今では完全に姉妹、いや双子の様に仲のいいエリカは、ソファの上で互いの足の爪にマニキュアを塗りながら声をかけてきた。無論、注意しているのは彼よりも自分達の足であるのは言つまでもない。

「いや、なんでもないんだ」

由紀夫はなんとかそれだけ答えた。

「あら、そう。・・・うふっ。可愛い」

「そっちこそ可愛いわよ」

「いいえ、そっちこそ」

「いいえ、そっちよ」

「いいえ、そっち!」

もつうんざりするほど聞いたエリカ達の褒め合いに、由紀夫は思わず立ち上がった。

しかし、彼女達は彼にかまう事はなく、やっぱり決まった文句で

「私達つて、やっぱり可愛い！」

と続けて、お互いに微笑み合うのだ。

それを見ていると、由紀夫は苛立ちのやり場をどこに向けていいか分からなくなつて、結局何にも出来なくなるのだ。確かに、二人のエリカは可愛いんだけど何かが違う。

この前、偶然彼女達が話している内容をこっそり聞いてしまったのだが、その内容は由紀夫にとってあまりにもショックキングで、深い穴に落ちるほど辛いものであった。

「もしも、あのキーホルダーを拾った人がイケメンだったら、もっと違う人生なのかも」

オリジナルのエリカがそう言う

「あの時、なんで彼に付いていったのか未だに分からないわ。どうして何だろうね？」

と、クローンのエリカが言った。

エリカは自分が二人になった事で、自分自身の相談を自分自身とする、言わば外からも見える自問自答をするようになったのである。そしたら当然、由紀夫の存在が話し合われる訳だ。

しかも、頻りに。

エリカは由紀夫のいない時、聞こえていない時を選んでいるのだろうが、どこか隙があつてかなりのドジッ子なのがエリカなのだから、彼は聞きたくなくてもしつかり聞いてしまっていた。

由紀夫がいかにショックを受けたかは、男性諸君ならずともお分かりだろう。

そして、彼も自問自答した。

はたして間違っているのは自分の方なのだろうか？彼女を幸せに
していない？

彼女を満足させていない？

こんなに尽くしているのに？

何でも買って上げているのに？

やっぱり、イケメンがいいのか？

僕は不細工なのか？

俺らの関係ってそんなもの？

やはり年の差が・・・？

色々浮かんでくるわけだが、なんだかんだエリカにはかなわない。
何しろ、向こうは二人なのだから、意見は多数決だといつても二対一
で負けてしまう。勝ち目が無いから、自分が間違っていると思っ
てしまうのだ。

それでいいのか？

これでも自分は男の子！いや、男なんだ！

由紀夫は鼻の穴を膨らませながら、そういきまいて腕を振り上げ
るのだが、二人が見ているところで出来ないのが由紀夫であった。
結局彼に出来るのは次の満月の夜が晴れる事を、ただただ祈る事だ
けだったのだ。

そして、神は由紀夫を裏切らなかつた。

その日の夜空には雲一つ無く、一ヶ月前よりも綺麗な満月が浮か
んでいた。由紀夫はさっそくエリカを呼び出し、自分もクローンを

造り出す事を彼女達に告げた。

「いいかい、ここに超簡単なマニュアルを作っておいたから、これを見て、書いてある通りにコントロールパネルを操作してくれ」

由紀夫はそう言って、二人にテキストを渡した。オリジナルのエリカがそれを受け取り、クローンのエリカと共に覗き込むと、二人同時に眉間に皺を寄せて、首を捻った。

「わかあんない！」

由紀夫ははやる気持ちを抑えて、二人をコントロールパネルの前に連れて行った。そして操作方法を説明しだした。

「大丈夫！絵で描いてあるから、そのまま操作すればいいのさ。ほら、こつちが制御装置なので、こつちが動力系。で、この赤いのがスタートボタンだ。そして……」

説明を聞くエリカ達は不安そうだが、唇を引き締めながらテキストとコントロールパネルを見比べていた。何、彼女達は馬鹿では無い。教えればすぐに分かってくれる、由紀夫はそう信じていた。

「ね、簡単でしょ？後は寝てればもう一人の僕の完成さ！」

由紀夫がそう言って笑うと、エリカ達は肩をすくめて微笑んだ。

「まあ、大体分かったわ」

「よろしく頼むよ。もし、手順を……」

「分かってる！私達ちゃんと出来るわ！ねえ、エリカ？だって、バカじゃないもの」

「そうよ！私達ちゃんと出来るわ！だから、安心して由紀夫はカプセルに入って」

二人のエリカは何故か自信を持ったような顔で、由紀夫の背中を押した。なので、由紀夫は急かされるようにカプセルに向かうと、おずおずと服を脱ぎだした。

「もう一度言うておくけど、設定された数値はいじらなくても大丈夫だからね。あやつるのは、操作系だけでいいんだよ」

「分かってるわよ、由紀夫。さあ、もう時間が無いでしょ。ちゃんとやるわ」

二人のエリカは同じように、彼を安心させるように微笑むと、由紀夫をカプセルの中にいれ蓋を占めた。すると、すぐに冷却装置が作動して、カプセル内に冷気がこもった。

由紀夫は若干不安になりながらも、目を閉じて胸の辺りで腕を組んだ。

彼女達もこれであの美しい光景を目の当たりにするんだろうな。集められた月光と、妖しい輝きをもつ第二の月を。

あの時は自分がこの中に入るなんて思いもしなかったけど、こうなればもう仕方ないのだ。もう一人の自分がいれば、そっちにクローンのエリカを担当してもらい、こっちはオリジナルのエリカと仲良くすればいい。まあ、こっちがクローンのエリカでもかまわないけど、とにかくそうすれば全てが丸く収まる。なんだか遠回りになった気がするけど、きつとそれで問題ないだろう。楽しい日々が戻ってくるのだ。

由紀夫は遠のく意識の中で、そんな事を思っていた。

どのくらい経っただろうか？

由紀夫は眩しい光を受けて、目を覚ました。すぐに自分が裸でカプセルの中にいる事が分かり、昨夜行われた実験を思い出すと、ドキドキする心臓とはやる気持ちを抑えて、ゆっくりとカプセルを開けた。

ラボラトリーには誰もいなくて、開け放たれた天井から鳥のさえずりが聞こえるだけで、静かな物であった。エリカは下に行ってしまったのだろうか？

まあ、自分みたくにずっとこの場所で様子を見ているなんて彼女には出来ない相談だから仕方ない。

由紀夫はカプセルから出ると、一番気になっている物を見ようと思っただ。

自分のクローンである。

すぐ隣のカプセルはまだ開いている様子は無い。立ち上がり、首や肩を少しほぐすと、うっすらと曇っているカプセルに手をかけた。そして、ドキドキしながらゆっくりと、それを開けて中を覗きこんだ。

いた！自分がいた！

まさに驚くべき事である。裸の自分が、寸分狂う事のないそのままの自分が、カプセルの中で目を閉じて眠っているのだ。

由紀夫は嬉しさと驚きを合わせたような複雑な表情で、自分のクローンに指で触れた。

少し冷たいが、感触はそのまま自分の物に違いない。今度は、肩を掴んで揺すってみた。すると、クローンは「うっ、うん」と言っただ、首を振って見せた。

確かに生きている！

由紀夫は嬉しくなつて、まるで兄弟でも起こすかのように、激し

くクローンを揺さぶった。しかし、なかなか起きないので頬を平手で打ちたくなつたが、なんだか自分をぶっている様で気がひけた。しかし、自分のように寝起きが悪いものだから、由紀夫は仕方なく顔をしかめながら平手を食らわせた。

すると、クローンはびっくりして目を開けると、大きく飛び上がった。

「な、なんだ！どうした！」

起き上がったクローンは頬を押さえながら、由紀夫と目を合わせた。

「君がやったのか？君が平手を？」

そう言ってくるクローンに、由紀夫は「そうだよ、兄弟！」とばかりに誇らしげに頷いた。すると、クローンは何の躊躇もなく由紀夫の頬に平手を食らわせた。思わぬ激痛に由紀夫はびっくりして、涙を出しながら手で顔を覆った。

「一回は一回だからね！」

そう言ってくるクローンに、由紀夫は唾を飛ばしながら非難の声を上げた。

「ひ、酷いじゃないか！殴り返してくるなんて！君は僕だぞ！」

しかし、クローンは肩をすくめるだけだ。顔は自分と同じなのに、なんだか雰囲気が違う。これが僕か？顔がまったく同じなのに、何とも言えない変な気持ちだ。

だから、由紀夫はどうしても我慢出来なくなって、さらにクローン

に詰め寄ろうとしたが、それを甲高い声が遮った。

「由紀夫！」

二人の由紀夫は同時にその声の聞こえた方向に振り向いた。ラボラトリーの入り口に、万遍の笑みを浮かべ、嬉しそうな顔をした二人のエリカが立っていた。二人の由紀夫は裸のままだったが、同じように顔をほころばせながら、同じように動き出し、同じように彼女を受け止めようと両手を広げた。

感動のご対面、そして、激しい抱擁！

二人の由紀夫の頭の中に、同じようにその言葉が浮かんでくる。

二人のエリカはその行動に導かれたのか、まるで猫がおもちゃに飛びつくように、由紀夫の元に走り寄ってきた。

ついに「愛と青春の旅立ち」ばりの抱擁が、二組同時に見られるのか！

何たる感動的な光景！

そして、エリカ達は彼に抱きついた。

「うん？」

その時由紀夫は信じられない光景を目にしていた。なんと、二人のエリカは、二人共クローンの由紀夫に抱きついていったのだ。

可哀想に、オリジナルの由紀夫は一人取り残されたまま、悲しい格好をしていた。

何で？

そんな事分かりはしない。

ただ、オリジナルの由紀夫の真っ白になる頭には、二人のエリカに最上級の歓迎を受けているクローンの自分がいる事実だけが浮かんでいた。

そして、クローンの勝ち誇る顔も。

クローンは、オリジナルの由紀夫を残して、じゃれ付いてくる二人のエリカを両脇に抱えながら、チャンピオンさながらに悠々とラボラトリーの入り口に歩いていった。

取り残されたオリジナルの由紀夫は何も言葉に出来ず情けない表情浮かべながら、その三人の後姿を見送るだけだった。

何でこんな事に？まったく同じはずなのに！

もしかして、ただ新しかったただだから？そんな理由か？いや、

そうじゃないかもしれない！

もっと別な理由が……。

色々な思いが脳裏に浮かぶが、自分が裸である事に気が付くと、由紀夫はおずおずと床に落ちている自分の服を着だし、湧き上がるところしようもない感情に震えた。

まさか、自分自身に嫉妬する事になるなんて！なんていう愚かな事だろう！

由紀夫は自分の浅はかな考えに、そして、これ以上ない不幸をもたらした自身の最高傑作に、深い溜息をつくのだった。

終

なんでこうなるの！！！（後書き）

どうでしたか？

気に入ったら感想なんか送ってくれたら幸いです

ではまた！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6236i/>

月と新宿とフィックルキャット

2011年1月28日14時22分発行